

2016年4月3日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 18章 19～33節

説教：私がおまえに代わって死ねばよかった

あらすじ

これまでのあらすじをふり返ります。ダビデの息子であるアブシャロムは父に刃向かい、自分こそイスラエルの王であると宣言いたします。これを聞いたダビデはエルサレムを脱出し、すぐその後にアブシャロムがエルサレムに入城します。自分が正式な王となるためには、父ダビデを殺さなければなりません。そのためにアブシャロム自らが出陣することになりました。ところが、その戦いのさなかにアブシャロムは死んでしまいます。これによって戦いの勝負が決まりました。それが18節までのあらすじでした。

1 誰が伝令に走るのか

1) ツアドクの子アヒマアツ

19節にツアドクの子アヒマアツが登場します。彼が何者であるのか。まずそこからはじめたいと思います。話はダビデがエルサレムを脱出する場面にさかのぼります。ダビデは、エルサレムから逃げるとき、ひそかに信頼できる人物を何人か町の中に残しておいていました。その情報網にキャッチされたのが、アブシャロムがダビデを追って軍隊を出すとの情報です。すぐにダビデに知らせる必要があります。誰が伝えるか。敵は監視の目を光らせています。もし見つかわれば殺されます。その危険な任務を担ったのがアヒマアツで、みごとにその役割を果たしたのです。

2) クシュ人が伝令となる理由

その彼が今、ダビデのところに走り、戦い

の結果知らせたいと考え、上司であるヨアブにその許可を求めます。しかしヨアブは許可しません。むしろクシュ人の男を読んで、伝令の役割を任せます。なぜヨアブは、アヒマアツではなくクシュ人を選ぶのか。それは、この戦いのためにダビデが軍隊を送り出すときに語ったことと深い関係があります。ダビデは、すべての民が聞こえるようにこう言ったのです。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」たとえアブシャロムを捕らえたとしても殺すようなことはしないで欲しい。そう願っていた。ところがアブシャロムは死んでしまいます。正確に言えば、ヨアブが槍でつき刺して殺したのです。王子が死んだことをダビデが知ったならどうなるか。伝えに走った者が殺される可能性があります。クシュ人はユダヤ人ではなく外国人です。最悪のことになったとしてもユダヤ人が死ななくて済みます。ヨアブがアヒマアツをやりたくなかったのにはこのような事情が隠されていました。

3) アヒマアツが追い越す

クシュ人の伝令はすぐに出発しました。でもアヒマアツはあきらめません。「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです」と、食い下がります。これにはさすがのヨアブも根負けしました。しぶしぶ許可します。

アヒマアツは地元の人です。クシュ人に比べたら、周辺の地形や道についてははるかに詳しい。どこにどんな近道があるかをわきま

えています。おそらくアヒマアツは、先に出発したクシュ人を追い越すことができると最初から計算していたのだらうと思われま

2 ダビデ

1) アヒマアツの報告

ここで場面は変わります。ダビデは門の所に座り、じりじりとしながらいまかいまかと報告を待っていました。そこへアヒマアツがやって来てこう言います。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」ひとことで言えば、「私たちは戦いに勝利しました」ということです。

これに対し、ダビデはなんと言ったか。「若者アブシャロムは無事か。」ダビデが最も知りたかったのは、戦いのことよりもアブシャロムの消息であったことがこれでわかります。アヒマアツは答えます。「ヨアブが王の家来のこの下部を遣わすとき、私は、何か大きな騒ぎが起るのを見ましたが、何があったのか知りません。」

このことばに注目したいと思います。彼は、アブシャロムが活着しているのか死んだのかそのことは知らないと言っています。本当に知らなかったのでしょうか。二つの意見があります。彼は本当に知らなかったのだという意見と、いや、彼は知っていたけれど知らない振りをしていたのだという意見です。どちらでしょう。

考えてみてください。クシュ人は、アブシャロムが殺されたことを知っています。それなのにアヒマアツだけがそのことを知らなかったということがあり得るのでしょうか。アブシャロムのことを知らずに、三度も

自分を伝令として走らせて欲しいと願いますか。どう見ても辻褄が合いません。むしろ、アヒマアツはアブシャロムのことを知っていたからこそ、自分が先にダビデへ向かわなければと願った。そう考えた方が自然です。ではなぜ彼は肝心のアブシャロムのことを話そうとしなかったのか。アヒマアツは何を考えていたのか。そのことはまた後で触れたいと思います。

2) クシュ人の報告

間もなく続いてクシュ人の伝令が到着しました。彼はこのように報告します。31節。「王さまにお知らせいたします。主は、今日、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」ひとことで言えば、自分たちは勝ったということです。そこまではよい。問題は次です。やはりダビデはアブシャロム消息を尋ねたとき、クシュ人はこう答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」遠回しの表現ではありますが、アブシャロムは死にましたと報告します。

3) 「私がおまえに代わって死ねばよかったのに」

ダビデの願いは打ち砕かれました。彼は震えながら屋上に上り、人々が見ている前で大泣きに泣きます。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

皆さんはこのダビデのことばをどう思われるのでしょうか。アブシャロムが事故や病氣

で死んだというのであれば、この気持ちはわかります。私たちだって、息子や娘を亡くしたなら、ダビデと同じように言うでしょう。でも、アブシャロムは何をしたのか。父親を憎み、ひそかにはかりごとを巡らして、自分こそイスラエルの王であると名乗り、父親をエルサレムから追い出し、最後は父を殺そうとした。そんな息子が死んだのです。非常に複雑な思いになるだろうと思います。少なくとも「私が代わって死ねばよい」とはすぐには言えないような気がします。

ではなぜダビデは言うのか。アブシャロムが一連の事件を起こしていく最初の頃からダビデは考えていました。なぜアブシャロムは自分に刃向かってくるのか。あいつだけが悪いのか。いや、さかのぼっていけば自分の罪にたどり着くのがわかりました。まだ自分が若かったときに犯したバテ・シェバとの姦淫事件。あのことがずっとダビデの家族を苦しめ続けてきました。長男のアムノンが妹のタマルと近親相姦の罪を犯したとき、父親としてはつきりとけじめをつけるべきだったのに、ダビデは何もしない。いやできなかった。自分の罪がうずいてしまうので、どうしても正しくさばくことができません。アブシャロムはそんな父親の姿を見て、非常に憤った。そのことが今回の事件の発端にあることをダビデはわかっていました。

だから言うのです。死ぬべきなのはいったい誰なのか。アブシャロムは確かに悪いことをした。でも、死ぬべきなのは自分ではないか。アブシャロムをここまで追い込んでしまったのは自分の責任である。そのことを悔やんで、ダビデが嘆き悲しみ続けます。

4) アヒマアツが心配していたこと

アヒマアツがヨアブに食い下がりながらもダビデのところへ走ろうとしたのはなぜか。そしてアブシャロムの消息について尋ねられたとき、知らない振りをしたのはなぜか。そのことをわきに置いたままでした。知らせに走ったから何かほうびをいただける訳ではありません。いや、それどころか殺される可能性さえあったのです。

アヒマアツは、ダビデのことを心から心配していたと考えてみたらどうでしょう。彼も、「アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ」と語るダビデのことばを聞いていました。そんなダビデが、自分の息子が死んだという知らせを聞いたらどうなるか。どれほど苦しむだろう。アヒマアツをそのことがわかる。だから先にまず自分が走って行き、こう言います。「私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」これを聞いてダビデは、アブシャロムの身になにか重大なことが起きたと考えるでしょう。クシュ人から深刻な知らせを聞かされる前に、ワンクッション置いてダビデに心の準備をさせる。それがアヒマアツの動機だったのだらうと思われれます。

3 十字架で子を捨てなければならない父なる神の思い

アヒマアツは心優しい人であったということかもしれません。でも今日私たちが見なければならぬのは、子が殺されるということがどれほど父親にとって悲しいことなのか。そこです。アヒマアツがこれだけの配慮をしなければならぬほどダビデにはつらい出来事であった。そのことを見るべきでしょう。

主イエス・キリストが十字架で苦しんでお

られたとき、父なる神はどんな気持ちだったのでしょうか。不思議なことに聖書にはそのことについて何も触れておりません。しかしきょうのダビデの姿から知らされます。ダビデは息子の代わりに死ぬことはできませんでした。しかし、私たちの主はダビデにできなかったことを成し遂げてくださいました。「あなたの代わりに、わたしは喜んで死んでいく。」

そのとき父なる神はどうされたか。「これはわたしの愛する子」と何度も呼びかけておられた父なる神は、愛する子が十字架で苦しんでおられたとき、沈黙されます。さばかなければならないからです。アブシャロムが死んだことにより、イスラエルに平安がもたらされました。それと同じように、神のひとり子が死ぬことによって、私たちは罪から救われ、平安（シャローム）が与えられました。

でも忘れてはなりません。主が十字架でさばかれたとき、父なる神が苦しまれたのです。その苦しみがどれほどのものであったのか、ダビデの嘆きのことばから知ることができます。

息子の名を呼びながら泣き嘆くダビデの姿から、ここまでして私たちを救おうとされる神の深い愛を覚えます。